サマープログラム体験記

名古屋大学 5 年　坂本鈴奈

このたび私は、2026 年 7 月 7 日から 13 日まで、Johns Hopkins University、Duke University、University of North Carolina、University of California, Davis、Lancaster University から 7 名、名古屋大学から 13 名の計 20 名でサマープログラムに参加し、かけがえのない経験をしました。アメリカとイギリスの学生から医療の違いだけでなく、文化や考え方の違いを学ぶことができ非常に有意義なものとなりました。

心に残っていることは、岐阜県での経験です。最初にかがやきクリニックでの経験やレクチャーを受け、たくさんのことを学びました。かがやきクリニックでの治療はただ病気を治すというものではなく、一人一人の患者に沿った治療であり、その人らしく過ごすためにできる社会的なサポートも提供していました。そこには医師だけでなく看護師や理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、歯科医師まで幅広い人が関わっており、患者さんが家で過ごせる環境をみんなで作っていく姿に、チーム医療の重要性を改めて感じました。また海外学生は訪問診療に同行することができ、そこで出会った実際の患者の症状やこれからの治療についてディスカッションをし、理解を深めることができました。
二つ目はカムカムスワローへの訪問です。カムカムスワローは病院主導で経営されているカフェで、嚥下機能の低下や麻痺がある患者に対しての食事を提供しています。自分の手でおいしいもの食べようということをコンセプトに、形を保ったままスプーンで簡単に崩れる程度の柔らかさのハンバーグを作っており、私たちも実際に食べることができました。見た目から食欲をそそられただけでなく、味もハンバーグそのままで非常に驚きました。食べやすく細かくしようとすると、ミキサーを使うことを一番に思い浮かべてしまっていましたが、見た目がおいしそうではないし食欲がそそられないこと問題となっていました。食事を楽しむために、リハビリで機能自体を回復するというアプローチだけでなく、食事から変えることで患者さんが食事を楽しむことができるのが非常に興味深いと思いました。

また今回のプログラムでは今までとは違い、バディ制度を設けて行われました。日本人と留学生で一対一、または二対一のペアを作り、ディスカッションやラボツアーなど様々な活動を行いました。ディスカッション中にはアメリカと日本の価値観や制度の違いを交えた、このプログラムならではの議論をすることができたと思っています。またバディ制度のおかげで学生とも仲良くなり、週末に一緒に出掛けたりカラオケに行ったりとさらに充実した日々を過ごすことができました。ラボツアーでは私自身もバディも興味のあった公衆衛生学を学び、さらにはこども食堂を訪れることもできました。

この経験を通して日本の地域医療を学べたことはもちろん、アメリカと比較して多角的な

視点からディスカッションができたことでさらに理解を深めることができました。英語でディスカッションをすることは、難しいときもあったが非常に楽しく有意義な時間を過ごすことができました。
最後になりましたが、このプログラムに関わってくださったすべての人に感謝を申し上げます。



